

茨城県教育財団文化財調査報告第245集

どう こし
堂 越 遺 跡

一般県道紅葉石岡線道路改良事業地内
埋蔵文化財調査報告書

平成 17 年 3 月

水戸土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県は、市町村や県の枠を越える広域的な交流と連携を進めるため、また、県土の均衡ある発展を支える基盤として、一般国道や主要地方道などの幹線道路網の整備を進めております。

このたび、茨城県水戸土木事務所は、茨城町生井沢地区において、一般国道紅葉石岡線道路改良事業を計画いたしました。その事業予定地内には堂越遺跡が所在します。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県水戸土木事務所から埋蔵文化財の発掘調査について委託を受け、平成15年8月から平成15年9月まで生井沢地区の発掘調査を実施しました。

本書は、堂越遺跡の調査成果を収録したものです。本書が、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県水戸土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、茨城町教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し感謝申し上げます。

平成17年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 齋藤佳郎

例 言

- 1 本書は、茨城県水戸土木事務所の委託により財団法人茨城県教育財団が平成15年8月から平成15年9月まで発掘調査を実施した、茨城県東茨城郡茨城町大字生井沢字稲荷後749番地ほかに所在する堂越遺跡（600cL）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調 査	平成15年8月1日～平成15年9月30日
整 理	平成16年9月1日～平成16年10月31日
- 3 発掘調査は、調査課長川井正一のもと、以下の者が担当した。

首席調査員兼第1班長	萩野谷 悟	平成15年8月1日～平成15年9月30日
主任調査員	小松崎 和治	平成15年8月1日～平成15年9月30日
副主任調査員	駒沢 悦郎	平成15年8月1日～平成15年8月31日
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理第二課長鶴見貞雄のもと、主任調査員小松崎和治が担当した。
- 5 本書の作成に際し、獣骨及び貝の鑑定を茨城県自然博物館山崎晃司氏・遠藤好氏にお願いした。

凡 例

- 1 地区設定は、日本平面直角第Ⅸ系座標（世界測地系）を用いて区画し、堂越遺跡はX軸 = +24,960m, Y軸 = +52,400mの交点を（A 1 a1）とした。

この基準点を基に遺跡範囲内を40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C……, 西から東へ1, 2, 3……とし、「A 1区」、「B 2区」のように呼称した。さらに小調査区も同様に北から南へa, b, c……, j, 西から東へ1, 2, 3…… 0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1区」、「B 2 b2区」のように呼称した。

- 2 土層の観察と遺物の観察における色調の判定には、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研地業株式会社）を使用した。

- 3 本文・全測図・実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は、次のとおりである。

遺構 SI- 住居跡 SK- 土坑 SD- 溝 SY- 炭焼窯跡 P- 柱穴

遺物 P- 土器 DP- 土製品 Q- 石器、石製品 M- 金属製品 G- ガラス製品

T P- 拓本土器

土層 K- 攪乱

- 4 遺構及び遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 焼土・釉・赤彩  炉・火床面・繊維土器断面
 竈・粘土・黒色処理  柱痕・煤・油煙

● 土器 ○ 土製品 □ 石器・石製品 △ 金属製品 ☆ 自然物 ——— 硬化面

- 5 遺構・遺物実測図の記載方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は400分の1、遺構は30分の1、60分の1、80分の1に縮尺して掲載した。

(2) 遺物は、原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に縮尺をスケールで示した。

- 6 「主軸」は、竪穴住居跡については炉・竈を通る軸線とし、他の遺構については長軸（径）を主軸とみなした。「主軸・長径方向」は、主軸・長径が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例「N-10°-E」）。なお、推定値は[]を付して示した。

- 7 一覧表・遺物観察表の表記は次のとおりである。

(1) 現存値は（ ）で、推定値は[]を付して示した。計測値の単位は、m, cm, gで示した。

(2) 遺物観察表の備考欄は、残存率や写真図版番号等、その他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号については、土器、拓本のみ掲載の土器片、土製品、石製品、金属製品、ガラス製品ごとに通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号は同一とした。

抄 録

ふりがな	どうこしいせき							
書名	堂越遺跡							
副書名	一般県道紅葉石岡線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第245集							
編著者名	小松崎和治							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029(225)6587							
発行機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029(225)6587							
発行日	2005年(平成17年)3月25日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
堂越遺跡	茨城県茨城郡 茨城町大字生井 沢字稲荷後749 番地ほか	08302 - 147	36度 13分 21秒	140度 25分 02秒	25 - 28m	20030801 - 20030930	4,428㎡	一般県道紅葉 石岡線道路改 良事業に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
堂越遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡	1軒	土師器(高坏, 甗, 小形甕, 甕), 土製品(球状土錘), 石器(敲石)		古墳時代, 平安 時代, 近世, 近 代の複合遺跡と ある。炭焼窯跡 からは陶磁器や ガラス製品など が投棄された状 況で出土しており, 時期が比較 的明確な炭焼窯 跡として重要で ある。	
		平安時代	竪穴住居跡	1軒	土師器(坏, 高台付坏, 甗, 小 形甕, 甕), 須恵器(坏, 甕, 壺), 土製品(紡錘車), 石器(砥石)			
	近世	土坑	1基	瓦質土器(内耳鍋),				
		溝跡	2条	瓦質土器(火鉢)				
	生産跡	近代	炭焼窯跡	1基	瓦質土器(土管, 甕, 敷輪, 置き 甗), 陶磁器(甕, 壺, 鉢, 摺り鉢, 碗, 茶碗, 鍋, 皿, 急 須, 蓋, 盃, 徳利), 瓦, 石製 品(石板, 砥石), 鉄製品(蹄 鉄, 鉄鍋, 鎌, 鋸), ガラス製 品(目薬瓶, 薬瓶)			
	その他	時期不明	土坑	84基	縄文土器(深鉢), 土師器(坏, 高台付坏, 甕), 須恵器(坏, 高台付坏, 甕), 瓦, 古銭(文 久永貨), 獣骨(ブタ頭蓋骨), 金属製品(切羽)			
			溝跡	1条				

目 次

序	
例言	
凡例	
抄録	
目次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	7
第1節 調査の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	8
1 古墳時代の竪穴住居跡と遺物	8
2 平安時代の竪穴住居跡と遺物	11
3 近世の遺構と遺物	14
(1) 土坑	14
(2) 溝跡	15
4 近代の炭焼窯跡と遺物	16
5 その他の遺構と遺物	18
(1) 土坑	18
(2) 溝跡	19
(3) 遺構外出土遺物	19
第4節 まとめ	29
写真図版	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県水戸土木事務所は、東茨城郡茨城町生井沢地区において、一般県道紅葉石岡線の道路改良事業を進めている。

平成14年6月24日、茨城県水戸土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、一般県道紅葉石岡線道路改良事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。

これを受けて茨城県教育委員会は、平成14年7月9日に現地踏査を、平成14年11月18日（～21日）に試掘調査を実施し、堂越遺跡の所在を確認した。平成14年12月3日、茨城県教育委員会教育長は茨城県水戸土木事務所長あてに、事業地内に堂越遺跡が存在すること及びその取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成14年12月24日、茨城県水戸土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3に基づき土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、計画変更が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成15年1月15日、茨城県水戸土木事務所長あてに工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

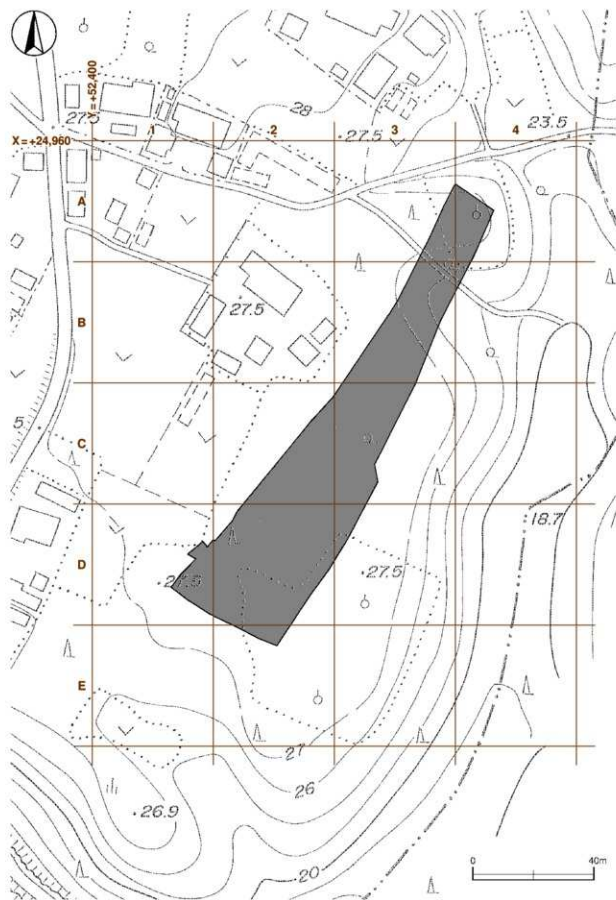
平成15年2月10日、茨城県水戸土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、一般県道紅葉石岡線道路改良事業に係わる埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成15年2月15日、茨城県教育委員会教育長は茨城県水戸土木事務所長あてに、堂越遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県水戸土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成15年8月1日から平成15年9月30日まで、堂越遺跡の発掘調査を実施することになった。

第2節 調査経過

堂越遺跡の調査は、平成15年8月1日から平成15年9月30日まで実施した。その概要を表で記載する。

期間	8 月	9 月
工程		
調査準備 表土除去 遺構確認	■	
遺構調査		■
遺物洗浄 注記作業 写真整理		■
補足調査 撤収		■



第1図 堂越遺跡調査区設定図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

堂越遺跡は、茨城県東茨城郡茨城町大字生井沢字稲荷後749番地ほかに所在し、巴川の左岸に面する標高25～28mの台地上に位置している。

茨城町の東部には潤沼があり、この潤沼へ西から流入する潤沼川、潤沼前川、寛政川、若宮川によって4地区に分断されている。また、それぞれの河川流域の低地には早くから開かれた水田地帯があり、また潤沼沿岸には明治以降干拓事業によって広大な水田地帯が形成されている。台地の大部分は、関東ローム層に厚くおおわれた洪積台地で、北部の標高は25～30m、南部が25～33mとなっている。

当遺跡は、小川町との町境となっている巴川左岸沿いに位置している。遺跡の主要部分は洪積台地上に位置するが、北東部の一部は谷津につながる傾斜地となり、若干標高が下がる。巴川流域には沖積低地が発達している。この沖積低地は最終氷期の海水準低下期に陸上の河川として形成された凹地が、後氷期の海水準上昇により溺れ谷となり、埋積されて生じたものである¹⁾。

当遺跡の調査前の現況は、山林と畑である。

第2節 歴史的環境

当遺跡の所在する巴川やその支流域は、古くから人々が生活を営む場として過していたことが、周辺遺跡の分布状況からもうかがい知ることができる。ここでは、当遺跡周辺の主な遺跡について述べる。

縄文時代には、巴川流域に面した台地上の縁辺部に集落が形成されたと考えられる。巴川左岸台地上には、堂下遺跡(6)、上原遺跡(7)、下原遺跡(8)、北原遺跡(9)、岸高山遺跡(10)などが位置している。上原遺跡は縄文時代前期・後期、下原遺跡は縄文時代中期の時期である。北原遺跡からは前期・中期・後期の縄文土器や打製石斧、磨製石斧、石皿が出土している²⁾。また、隣接する鉾田町には、木間塚遺跡(11)、古持台遺跡(13)、入場台遺跡(14)、浜海道遺跡(15)、新山遺跡(16)などが所在している。巴川右岸の小川町には仲佐才遺跡(23)、中坪遺跡(28)、芝崎遺跡(29)、羽抜沢遺跡(30)、すすき山遺跡(31)などが所在している。仲佐才遺跡からは縄文中期・後期の土器片等が採集されている³⁾。

弥生時代の遺跡としては、茨城町の岸高山遺跡や鉾田町の大乗遺跡(19)などがある。岸高山遺跡からは、弥生時代後期の土器が採集されている。また、大乗遺跡からも弥生時代後期の土器が採集されている⁴⁾。大乗遺跡のある鉾田町紅葉地区からは、「常陸国鹿嶋郡巴村紅葉出土」の土器として学史に名高い十王台式土器が出土している⁵⁾。

古墳時代の遺跡としては、住吉山古墳(2)、中塚古墳(3)、板東西遺跡(5)、北原遺跡が知られている。住吉山古墳は直径28.5m、高さ3.2mの円墳で、埴輪片が出土している。中塚古墳は東西16.4m、南北21.5m、高さ2.1mの円墳で、町指定文化財の石枕及び土師器が出土している⁷⁾。鉾田町には宿畑遺跡(18)、大乗遺跡が所在している。巴川下流右岸の青柳には不二内古墳が位置している。この古墳からは、明治30年に『東京人類学会雑誌』に紹介された壺を捧げる女子像など著名な埴輪が出土している⁸⁾。また、巴川を挟み小川町には、羽抜沢遺跡、すすき山遺跡が所在している。

奈良・平安時代になると、生井沢地区は茨城郡に編入されることとなり、『和名類聚抄』中の白川郷に属し

たとされている⁹⁾。奈良・平安時代の遺跡として板東西遺跡，北原遺跡が，鉾田町には古持台遺跡，浜海道遺跡が所在している。

中世には生井沢地区は畑田氏の支配するところとなる。天福2(1234)年の『畑田秀幹讓状』に「畑田 富田 大和田 生江沢」とあり，生江沢は子の三部朝秀に私領として譲られている。また，文暦2(1235)年の『將軍家政所下文』によれば，生井沢は平(畑田)朝秀によって地頭職として支配されることになった。天正19(1591)年以降この地域は佐竹氏の支配下に入り，文禄3(1594)年の太閤検地で茨城郡に，翌4(1595)年には『佐竹義宣充行状写』によれば，菊池信濃守の支配下に入ったことが知られる¹⁰⁾。

近世の生井沢地区は，慶長7(1602)年の佐竹氏秋田移封の後，水戸藩領となり，郡制下では初め南組(郡)で，寛政12(1800)年に野合組，同年7月に紅葉組となり，天保2(1831)に南郡となっている。文久年間(1861-63)には空閑稲荷から勧請した稲荷社がつくられ，縁日などには広く参詣者が訪れたとされている。この稲荷社は火災により焼失し，明治中期に字東山に遷され，現在も板宮がある¹¹⁾。

近代の生井沢地区は明治4(1871)年7月の鹿藩置県で水戸県，さらに11月に茨城県に属することになり，現在に至っている。

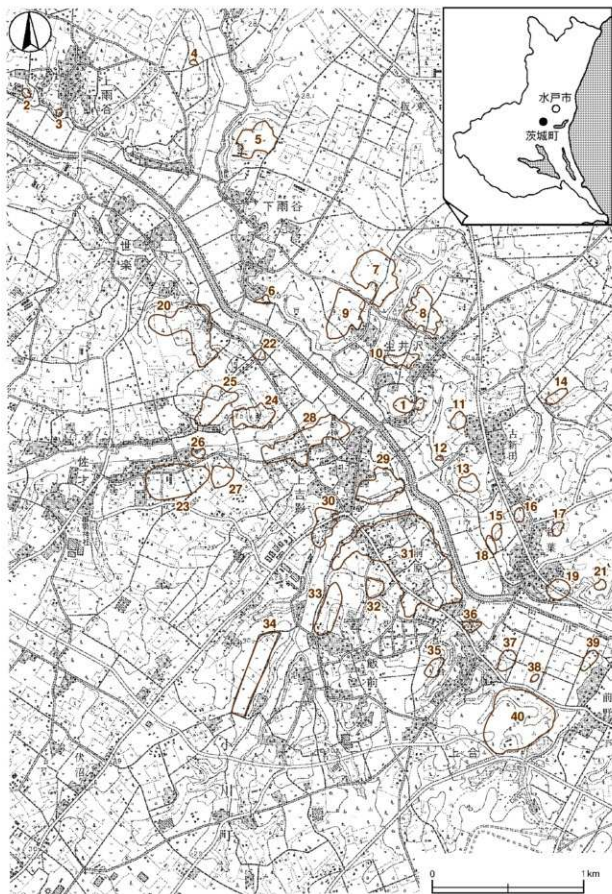
※ 文中の()内の番号は，第1図及び周辺遺跡一覧表の該当番号と同じである。

註)

- 1) 小川町史編さん委員会 『小川町史』 小川町 1982年3月
- 2) 茨城町史編さん委員会 『茨城町史 地誌編』 茨城町 1993年3月
- 3) 註1)文献と同じ
- 4) 鉾田町史編さん委員会 『鉾田町史 原始・古代史料編』 鉾田町 1995年3月
- 5) 茨城県考古学協会・十王町教育委員会 『茨城県における弥生時代研究の到達点』 茨城県考古学協会 1999年11月
- 6) 鈴木素行 『紅葉が散るまで』 『菟玖波 第3号』 菟玖波倶楽部 1999年 3月
- 7) 註2)文献と同じ
- 8) 茨城県史編さん原始古代史部会 『茨城県史料=考古資料編 古墳時代』 茨城県 1974年2月
- 9) 池邊 彌 『和名類聚抄郡郷里縣名考證』 吉川弘文館 1981年2月
- 10) 茨城県史編集会 『茨城県史料 中世編I』 茨城県 1991年3月
- 11) 註2)文献と同じ

参考文献

- ・ 茨城県教育庁文化課 『茨城県遺跡地図』 茨城県教育委員会 2001年3月
- ・ 蜂須紀夫 『茨城県 地学のガイド』 コロナ社 1986年11月



第2図 堂越遺跡周辺遺跡分布図

表1 堂越遺跡周辺遺跡一覧表

番 号	遺 跡 名	時 代						番 号	遺 跡 名	時 代						
		旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳	奈 ・ 平	中 世			近 世	旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳	奈 ・ 平	中 世
①	堂 越 遺 跡	○		○	○	○		21	紅 葉 城 跡					○		
2	住 吉 山 古 墳				○			22	沖 ノ 向 遺 跡	○		○				
3	中 峯 谷 古 墳				○			23	仲 佐 才 遺 跡	○			○		○	
4	上 雨 ヶ 谷 十 三 塚						○	24	上 吉 影 沖 ノ 向 遺 跡						○	
5	板 東 西 遺 跡	○	○	○	○			25	天 神 峰 遺 跡	○						
6	堂 下 遺 跡	○						26	あ ん こ う 久 保	○						
7	上 原 遺 跡	○						27	深 山 遺 跡	○						
8	下 原 遺 跡	○						28	中 坪 遺 跡	○			○		○	
9	北 原 古 墳	○		○	○			29	芝 崎 遺 跡	○			○		○	
10	岸 高 山 遺 跡	○	○					30	羽 抜 沢 遺 跡	○		○	○			
11	木 間 塚 遺 跡	○						31	す す き 山 古 墳	○		○	○	○		
12	木 間 塚						○	32	新 立 遺 跡	○						
13	古 持 台 遺 跡	○			○			33	西 新 田 遺 跡	○						
14	入 場 台 遺 跡	○						34	後 峰 遺 跡	○						
15	浜 海 道 遺 跡	○			○	○		35	小 山 遺 跡	○						
16	新 山 遺 跡	○				○		36	上 合 天 神 遺 跡	○						
17	仙 助 作 遺 跡	○				○		37	道 添 西 手 遺 跡	○			○			
18	宿 畑 遺 跡			○		○		38	サ イ 力 子 遺 跡							○
19	大 乗 遺 跡	○	○	○				39	館 小 路 遺 跡						○	○
20	前 山 遺 跡	○		○				40	西 ノ 内 遺 跡	○		○			○	

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

堂越遺跡は縄文時代、古墳時代、平安時代、近世、近代の複合遺跡である。

今回の調査では、古墳時代中期の竪穴住居跡1軒、平安時代の竪穴住居跡1軒、近世の土坑1基、溝跡2条、近代の炭焼窯跡1基等が確認されている。調査対象面積は4,428㎡である。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に13箱出土している。縄文時代の遺物としては、早期～後期の土器片及び石器が出土している。古墳時代の遺物は土師器(高坏, 甌, 甕, 小形甕), 土製品(球状土錘)である。平安時代の遺物は土師器(坏, 高台付坏, 甌, 小形甕, 甕), 須恵器(坏, 甕, 壺), 土製品(紡錘車)である。近世の遺物は瓦質土器(内耳鍋, 火鉢)などである。近代の遺物としては、炭焼窯に投棄されていた瓦質土器(土管, 甕, 敷輪, 置き甕), 陶磁器(甕, 壺, 鉢, 播り鉢, 碗, 茶碗, 鍋, 皿, 急須, 蓋, 盃, 徳利), 瓦, 石製品(石板, 砥石), 鉄製品(蹄鉄, 鉄鍋, 鎌, 鋸), ガラス製品(目薬瓶, 薬瓶)などである。

第2節 基本層序

調査区内に基本土層を確認するテストピットを設定し、第3図に示すような土層堆積の状況を確認した。

第1層は表土で、黒褐色を呈し、ローム粒子を少量含んでいる。層厚は約30cmである。

第2層は暗褐色層で、しまりは弱く、ローム粒子、炭化粒子を微量含んでいる。層厚は12cmほどである。

第3層は褐色のソフトローム層である。層厚は約20cmである。

第4層は褐色のローム土層で、赤色粒子を微量含んでいる。層厚は約30cmである。

第5層はハードローム最上部で、黄褐色を呈している。層厚は約40cmである。

第6層は黄褐色のハードローム層で、鹿沼バミス層への漸移層である。鹿沼バミスを少量含んでいる。層厚は約15cmである。

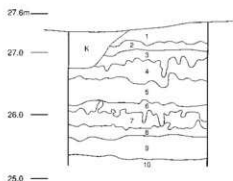
第7層は明黄褐色で鹿沼バミスの純層である。層厚は約10～26cmほどあり、地表面から約140cm下層で確認された。粘性は極めて弱い。

第8層はにぶい黄褐色のローム土層で、鹿沼バミスを微量含んでいる。粘性が強く、締まっている。層厚は約20cmである。

第9層は褐色のローム土層である。層厚は約40cmである。

第10層はにぶい黄褐色の粘土層で、黒色粒子を微量含んでいる。粘性が強く、締まっている。層厚は下層が未掘のため不明である。

遺構は、第3層の上面で確認できた。



第3図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 古墳時代の竪穴住居跡と遺物

第1号住居跡（第4・5図）

位置 調査区北部のB3d9区で、台地の斜面部に位置している。

規模と形状 長軸4.77m、短軸4.46mの方形で、主軸方向はN-40°-Eである。壁高は21-79cmで、直立している。

床 ほぼ平坦で、主柱穴の内側を中心に踏み固められている。

炉 中央部西寄りに設けられている。長径45cm、短径39cmの楕円形で、床面を12cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火熱で赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|--------------------------|---------------------------------|
| 1 暗 赤 褐 色 焼土粒子中量、ローム粒子微量 | 2 暗 赤 褐 色 焼土粒子中量、ローム粒子・焼土ブロック微量 |
|--------------------------|---------------------------------|

ピット 6か所。P1-P4は深さ49-55cmで、配置と規模から主柱穴と考えられる。P5は深さ46cmで、東壁際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ24cmで、P2とP3の間に位置しているが、性格は不明である。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は北コーナー部に位置し、長径65cm、短径59cmの楕円形で、深さは48cmである。貯蔵穴2は南コーナー部に位置し、長径89cm、短径76cmの楕円形で、深さは53cmである。

貯蔵穴1土層解説

- | | |
|--------------------------|-----------------|
| 1 暗 褐 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 3 褐 色 ロームブロック少量 |
| 2 暗 褐 色 ロームブロック少量 | 4 褐 色 ロームブロック中量 |

貯蔵穴2土層解説

- | | |
|-------------------|-----------------|
| 1 暗 褐 色 ロームブロック微量 | 3 褐 色 ロームブロック中量 |
| 2 暗 褐 色 ロームブロック少量 | |

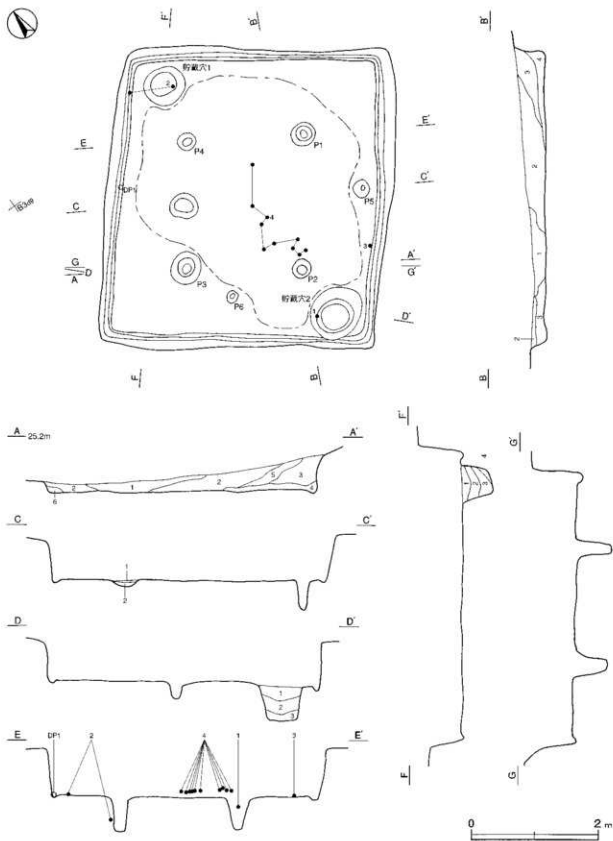
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

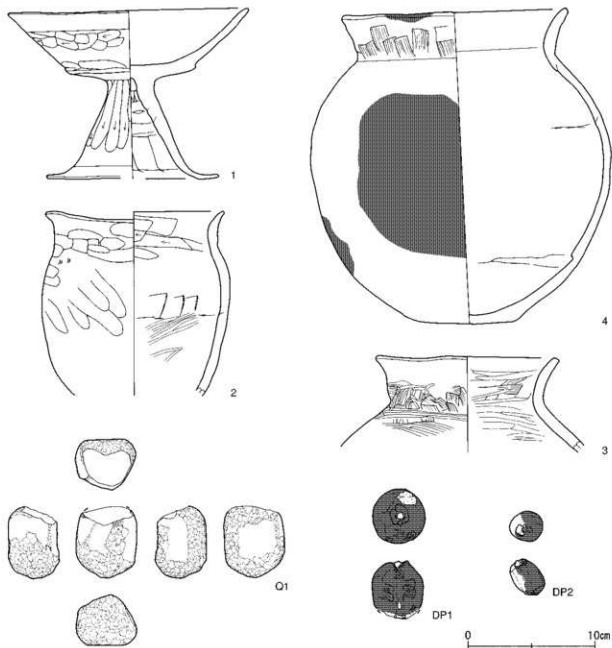
- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1 黒 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 褐 色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗 褐 色 ローム粒子微量 |
| 3 褐 色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗 褐 色 ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土器器片178点（高坏1，甔4，甕173），土製品2点（球状土錘）が出土している。1の高坏は貯蔵穴2の覆土中層から、2の甕は貯蔵穴1と北コーナー部の床面の破片が接合したものである。3は東壁際床面から、4は中央部覆土下層から出土している。出土状況から、出土した完形品や破片の大半は遺棄されたものと判断した。また、流れ込みと考えられる縄文土器片8点、弥生土器片3点、敲石1点、攪乱により混入したと見られる陶器片1点、不明鉄製品5点が出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀前半と考えられる。



第4图 第1号住居跡实测图



第5図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表(第5図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	高坏	18.7	13.5	13.5	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外壁へう削り、口縁部内外壁様ナデ	貯蔵穴? 覆土中層	90% PL 4
2	土師器	小形甕	13.9	(14.6)	-	石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面ナデ、体部内面磨き	北コーナー床面	70% PL 4
3	土師器	小形甕	14.5	(7.7)	-	石英・赤色粒子	橙	普通	胴部内・外面八ヶ目整形後磨き	東壁障床面	10%
4	土師器	甕	17.5	24.9	7.6	長石・赤色粒子・小礫	にぶい黄橙	普通	胴部外面八ヶ目整形後ナデ	中央部覆土下層	60% 体部外面僅付着・火熱痕 PL 4

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		径	孔径	厚さ	重量				
DP1	球状土罐	4.1	0.5	4.6	75.4	粘土(石英・雲母)	球体, 外面ナデ	西壁障床土中	90% PL 4
DP2	球状土罐	2.7	0.6	2.7	15.0	粘土(雲母・白色粒子)	球体, 外面ナデ	西壁障土中下層	100% PL 4

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴・その他	出土位置	備考
Q 1	融石	(5.6)	4.8	4.0	149.6	砂岩	両端に融打痕、側面にも一部融打痕	S11東部下層	PL 5

2 平安時代の竪穴住居跡と遺物

第2号住居跡(第6・7図)

位置 調査区南部のD 2 f 3区で、台地の平坦部に位置している。

重複関係 第10・61号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.45m、短軸3.40mの方形で、主軸方向は N-43°-Eである。壁高は33~45cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。

竈 北壁の中央部に付設されている。焚口部から煙道部までの長さ112cm、袖部幅76cmで、煙道部が壁外へ70cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。火床部は床面と同じ高さの平坦面を利用しており、火床面は焼土の広がりが確認できる程度である。竈土層の16層が袖部の土層である。

竈土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	9 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 褐色	焼土ブロック・ローム粒子微量	10 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量	11 褐色	焼土粒子少量・ロームブロック微量
4 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	12 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
5 暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	13 暗褐色	焼土粒子少量、ロームブロック・炭化物微量
6 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量	14 にぶい赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物微量
7 暗褐色	ロームブロック・炭化物微量	15 にぶい赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
8 暗赤褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	16 灰褐色	砂質粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 2か所。P2は深さ21cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P1は深さ25cmで、南コーナー部寄りに位置し、支柱穴と考えることも可能であるが、対応する他のピットが確認されていないことから、性格は不明である。

貯蔵穴 西コーナー部に位置し、径50cmの円形で、深さは35cmである。

貯蔵穴土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量	3 褐色	ロームブロック中量
2 暗褐色	ローム粒子・炭化物少量		

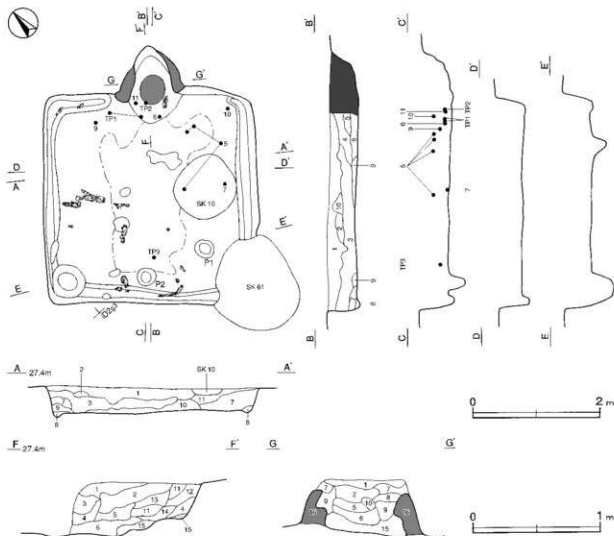
覆土 11層に分層される。周囲からの土砂の流入を示す自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
2 褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	8 褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量
3 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 暗褐色	焼土ブロック・炭化物微量
4 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	10 暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
5 暗赤褐色	焼土粒子少量、ローム粒子微量	11 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
6 暗褐色	ローム粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量		

遺物出土状況 土師器片210点(坏29,高台付坏2, 甕1, 甕178), 須恵器片9点(坏3, 甕4, 壺2), 土製品1点(紡錘車)が出土している。6は竈焚き口下層から、8・12は竈覆土中から出土している。また、流れ込んだ縄文土器片7点、磁石1点、攪乱により混入したとみられる土師質土器片1点が出土している。

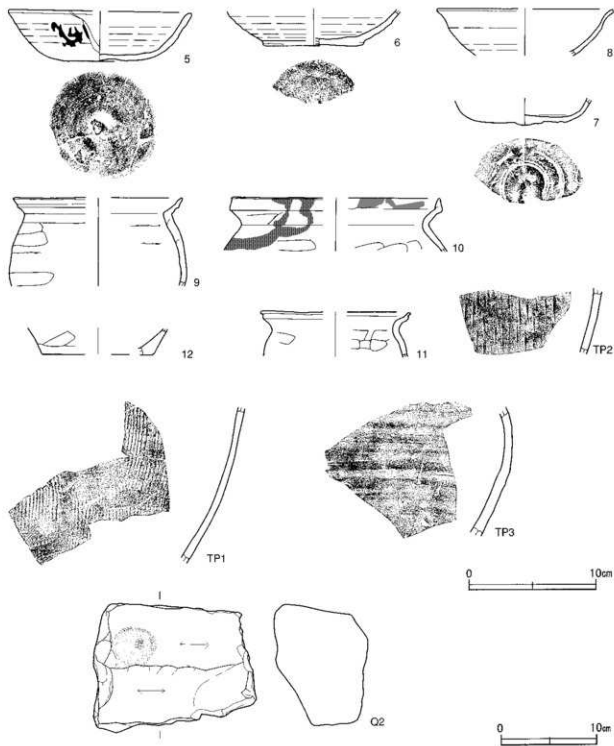
所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。床面には炭化材や焼土が広がっており、焼失住居跡と考えられる。



第6図 第2号住居跡実測図

第2号住居跡出土遺物観察表 (第7図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5	須恵器	坏	[14.1]	3.8	7.7	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部口口整形, 底部回転ヘラ切り	北東部下層	55% 「成」の墨書 PL 5
6	須恵器	坏	- (2.9)	[7.8]	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部口口整形, 底部回転ヘラ切り	竈焚き口下層	20%
7	須恵器	坏	- (2.2)	6.1	-	長石・雲母	にぶい黄	普通	体部口口整形, 底部回転ヘラ切り	東部床面	25%
8	須恵器	坏	[13.8]	(3.7)	-	石英	浅黄	普通	体部口口整形, 体部内面横ナデ	竈覆土中	20%
9	土師器	小形甕	[13.3]	(7.0)	-	長石	にぶい橙	普通	体部外面ヘラナデ	北部覆土下層	10%
10	土師器	甕	[16.2]	(4.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部内外面ヘラナデ, 口縁部内外面横ナデ	東コーナー中層	5% 煤付着
11	土師器	小形甕	[11.6]	(3.5)	-	石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内外面ヘラナデ, 口縁部内外面横ナデ	北部覆土下層	5%
12	土師器	甕	- (2.1)	[8.8]	-	雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラナデ	竈覆土中	5%
TP 1	須恵器	甕	- (12.3)	-	-	長石・雲母	橙	普通	体部外面タタキ	竈焚き口下層	5%
TP 2	須恵器	甕	- (5.2)	-	-	長石	灰黄	普通	体部外面タタキ	竈覆土下層	5%
TP 3	須恵器	甕	- (10.2)	-	-	小礫	灰白	普通	体部内外面口口目	南部覆土下層	5%



第7図 第2号住居跡出土遺物実測図

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴・その他	出土位置	備考
Q 2	砥石	16.9	13.4	9.4	2890	砂岩	一部凹石として使用，表面1孔	SI 2南西部下層	PL 5

3 近世の遺構と遺物

近世の遺構としては、土坑1基、溝跡2条を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 土坑

第19号土坑（第8図）

位置 調査区南部のD2c3区で、台地の平坦部に位置している。

規模と形状 長軸2.04m、短軸1.26mの隅丸長方形で、深さ12cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。

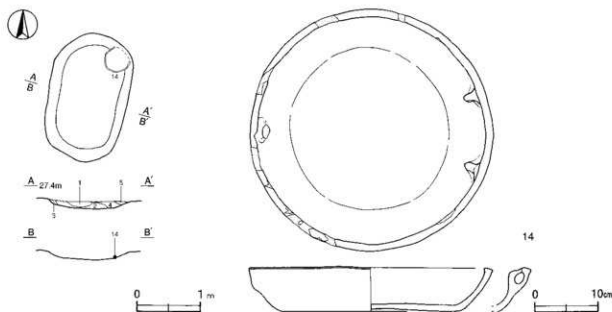
覆土 5層に分層される。ロームブロックを不規則に含む堆積状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック中量、ローム粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 褐色 | ローム粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片12点（内耳鍋）が出土している。P14の内耳鍋は北東コーナー部から正位で出土し、内部に多量の灰と焼土が残存していた。

所見 時期は、出土土器から17世紀前葉と考えられる。性格については不明である。



第8図 第19号土坑・出土遺物実測図

第19号土坑出土遺物観察表（第8図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
14	瓦質土器	内耳鍋	38.1	7.0	27.8	石英・赤色 粒子	黒褐色	普通	体部内・外面ナデ	北部底面	95% PL 4

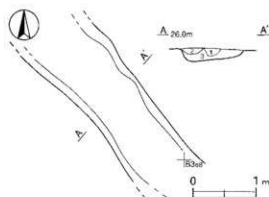
(2) 溝跡

第2号溝跡(第9図)

位置 調査区北部のB3c7～B3e8区で、台地の平坦部から斜面部に位置している。

規模と形状 B3c7区から南東方向にほぼ直線的に延び、B3e8区の斜面部に入っている。上幅0.84～1.39m、下幅0.54～1.23m、深さ11～23cmで、確認できた長さは7.56mである。断面形は、壁が緩やかに立ち上がるU字形を呈している。

覆土 3層に分層される。堆積状況は周囲からの土砂の流入を示す自然堆積である。



第9図 第2号溝跡実測図

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

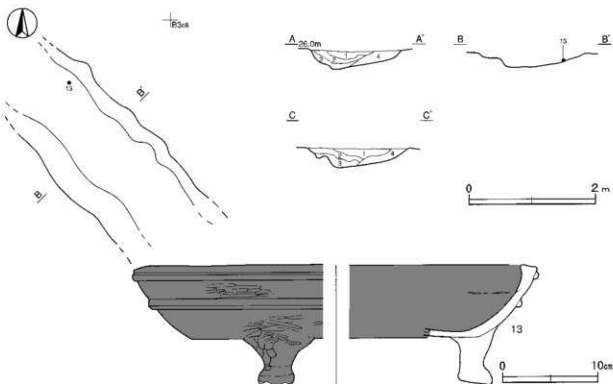
- 3 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 瓦質土器片2点(火鉢)が出土している。底部の細片で図示することはできなかった。火鉢は平行して存在する第3号溝跡からも出土しているが、接合関係はない。また、流れ込みと考えられる縄文土器片6点、石鏃1点が出土している。

所見 時期は、17世紀前葉と考えられる土器が投棄されていることから、近世の溝と考えられる。本跡は埋没谷に向かっていていることから、排水路的な性格を持っていたと考えられる。

第3号溝跡(第10図)

位置 調査区北部のB3b6～B3d8区で、台地の平坦部から斜面部に位置している。



第10図 第3号溝跡・出土遺物実測図

規模と形状 上幅1.19～1.64m，下幅0.53～1.08m，深さ10～32cmで，確認できた長さは11.22mである。断面形状はU字形を呈している。南東方向にほぼ直線的に延び，斜面部に入っている。

覆土 4層に分層される。周囲からの土砂の流入を示す自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|----------------|------|---------------------|
| 1 黒 褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 3 褐色 | ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗 褐色 | ローム粒子中量 | 4 褐色 | ローム粒子少量，炭化粒子微量 |

遺物出土状況 瓦質土器片12点（火鉢）が出土している。また，流れ込みと考えられる縄文土器片4点，土師器1点，礫石斧1点が出土している。

所見 時期は，17世紀前葉と考えられる土器が投棄されていることから，近世の溝と考えられる。第2号溝跡と平行して埋没谷に向かっていていることから，排水路的な性格を持っていたと考えられる。

第3号溝跡出土遺物観察表（第10図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
13	瓦質土器	火鉢	[41.8]	12.5	[29.6]	粘赤黄緑色	にぶい黄緑	普通	体部外面へラ磨き	西部埋土中層	PL 4

4 近代の炭焼窯と遺物

第1号炭焼窯跡（第11図）

位置 調査区南部のD 2 g 2 区で，台地の平坦部に位置している。

規模と形状 長径4.80m，短径2.47mの不定形で，長径方向はN-138°-Eである。

前庭部 平面形は長径1.80m，短径1.26mの楕円形で，底面は平坦である。

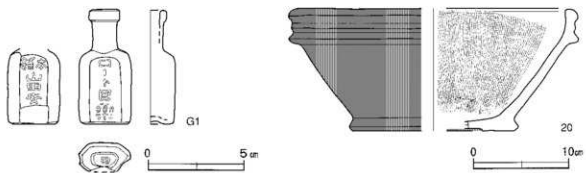
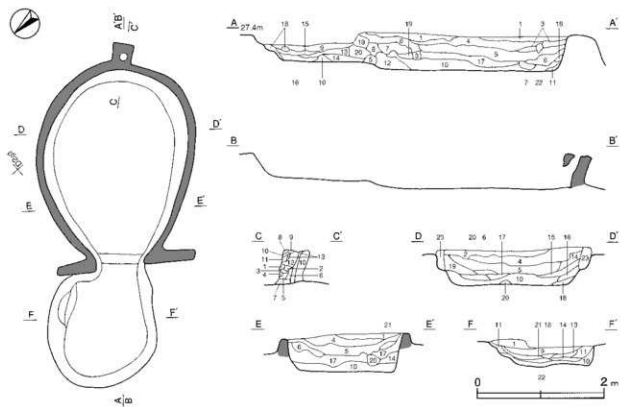
炭化室 平面形は長径3.00m，短径2.66mの馬蹄形で，遺存する壁高は48～60cmである。窯壁は厚さ8～18cmの粘土が貼られ，ほぼ直立している。炭化室と前庭部の間には北側50cm，南側78cmの粘土による障壁を設けている。窯底は前庭部より13cmほど低くなり，ほぼ平坦で地山面上に構築されている。壁面及び窯底は火熱で赤変硬化している。

煙道部 土層断面から，1層から7層はブロック状の焼土や炭化物を多く含み，しまりが弱いことから，窯壁が崩落したものと考えられる。8・9層は廃絶後に堆積した土層と考えられる。10層は窯壁の層である。11層・12層は窯壁が火熱で赤変し，さらに12層の内面は炭素の吸着により，黒色となっている土層と考えられる。13層は煙道部に敷設した煙出し用の土管が，抜き取られた跡に堆積した土層と考えられる。

煙道部土層解説

- | | | | |
|-----------|---------------------------|------------|-------------------------|
| 1 暗 赤 褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量 | 7 暗 赤 褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック少量，炭化物微量 |
| 2 暗 赤 褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化物微量 | 8 にぶい褐色 | 粘土ブロック・ローム粒子少量，焼土ブロック微量 |
| 3 暗 赤 褐色 | 焼土ブロック少量，ロームブロック・炭化物微量 | 9 明 褐色 | ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック中量，ロームブロック・粘土ブロック少量 | 10 橙 褐色 | 粘土ブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 暗 暗 赤褐色 | 焼土ブロック・炭化物少量，粘土ブロック微量 | 11 明 赤 褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子中量，ローム粒子微量 |
| 6 明 赤 褐色 | 焼土ブロック多量，ロームブロック・粘土ブロック微量 | 12 褐色 | ロームブロック中量，粘土ブロック・炭化物微量 |
| | | 13 暗 暗 赤褐色 | 焼土ブロック中量，粘土ブロック・炭化物少量 |

覆土 23層に分層される。ブロック状の堆積状況を示すことから人為堆積である。5層・17層などの中層には近・現代の多量の遺物が投棄されていた。



第11图 第1号炭烧窑跡・出土遺物実測图

土層解説

1	褐色	粘土ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量	13	暗褐色	焼土粒子・粘土粒子少量
2	褐色	ロームブロック少量	14	灰黄褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量
3	にぶい赤褐色	焼土粒子少量，焼土ブロック微量	15	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
4	暗褐色	炭化材中量，ローム粒子・焼土粒子微量	16	暗褐色	ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
5	灰褐色	炭化物少量，ローム粒子微量	17	にぶい赤褐色	焼土ブロック・炭化物少量，粘土ブロック微量
6	灰黄褐色	炭化物中量，ロームブロック少量，粘土ブロック微量	18	褐色	ロームブロック中量，焼土粒子微量
7	明赤褐色	焼土ブロック多量，粘土ブロック少量，炭化物微量	19	にぶい赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量
8	灰黄褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	20	灰黄褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子微量
9	暗褐色	ロームブロック・炭化物少量	21	暗褐色	ロームブロック微量
10	灰黄褐色	ロームブロック・粘土ブロック・炭化物少量，	22	暗褐色	炭化粒子少量，ローム粒子・炭化物微量
11	褐色	ロームブロック中量	23	にぶい黄褐色	粘土粒子多量，鹿沼バミス少量
12	にぶい赤褐色	焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量			

遺物出土状況 瓦質土器 1点(土管)が出土している。内部に煤が大量に付着しており，煙道部に埋設し煙突として使用したものと考えられる。また，混入したと考えられる縄文土器片 1点，土師器片 1点(坏)，炭焼窯廃絶後に投棄されたと考えられる瓦質土器片104点(甕7，敷輪2，置き籠2)陶磁器片240点(椀34，壺4，鉢9，描り鉢4，碗37，茶碗85，鍋13，皿15，急須15，蓋5，盂2，徳利17)，瓦片14点，石製品(石板1，砥石1)鉄製品81点(蹄鉄1，鎌1，鋸2，鉄鍋15，不明鉄製品62)，自然石24点，ガラス製品74点(瓶7，石蹴り用玩具1，不明66)，炭化材7点，ウバガイ・ハマグリ貝殻片が出土している。投棄されているG1のガラス瓶(目薬容器)は，明治末から昭和初期に製造されたものである。またP16・17の徳利には，近在の町名と店名がプリントされている。

所見 炭焼窯が廃絶された後に，大量の不要物が投棄されたものと考えられる。明治末期から導入が本格化した改良窯の形状を呈していることから，時期は明治末以降～戦前と考えられる。

第1号炭焼窯跡出土遺物観察表(第11図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
15	瓦質土器	土管	[14.4]	(17.5)	[14.4]	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	体部に横方向5本の平行沈線	SY1層土中	内面炭化物付着，火熱層 20% PLS
20	陶器	描り鉢	[28.4]	12.2	[16.8]	長石・石英	暗褐色	普通	24糸1単位の描り目	SY1層土中	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・輪筆	手法の特徴	出土位置	備考
16	磁器	徳利	-	(16.1)	5.6	灰白	プリント柄	図柄 えのころ草「稲野屋酒店」の銘	SY1層土中	PL 5
17	磁器	徳利	[2.8]	17.5	5.8	灰白	プリント柄	「常陸国石岡町 大徳」の銘	SY1層土中	PL 5

番号	種別	器種	器高	底径	重量	材質	特徴・その他	出土位置	備考
G1	瓶	目薬瓶	1.1	5.9	2.3	ガラス	「ロート目薬」，「本舗 山田安」の銘有り	SY1層土中	PL 6

5 その他の遺構と遺物

時期及び性格が不明な土坑84基，溝跡1条を確認した。遺物としては，旧石器時代から近代までのものが出土した。

(1) 土坑

時期及び性格が不明な土坑のうち，第30号土坑について記述する。その他の土坑については一覽表で記載する。各土坑平面図は全体図に示した。

第30号土坑（第12図）

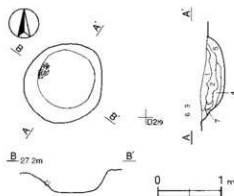
位置 調査区南部のD 2 e 8 区で、台地の平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.34m、短径1.20mの楕円形で、深さ38cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 7層に分層される。ブロック状の堆積状況を示しており、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|-------|------------------------|
| 1 | 暗褐色 | 焼土ブロック・炭化物少量、ローム粒子微量 |
| 2 | にぶい橙色 | 焼土ブロック多量、炭化物少量 |
| 3 | 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化物中量 |
| 4 | 暗赤褐色 | 炭化粒子多量、焼土ブロック・炭化物中量 |
| 5 | 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物少量 |
| 6 | 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 7 | 褐色 | ロームブロック中量 |



第12図 第30号土坑実測図

遺物出土状況 プタの頭骨1点が、頭蓋骨から下顎骨にかけて、良好な状態で出土している。また、覆土中からは混入と考えられる切羽と瓦片が出土している。

所見 出土した頭骨は、野性のイノシシに近い形状をもったプタの可能性が高い。上顎の第1・2臼歯が生え、下顎骨の第1臼歯が完全に生えきっていないことから、1才6ヶ月ぐらいの幼体と考えられる。時期は、頭骨に獣毛が一部残存しており、明治以降と考えられる。

(2) 溝跡

第1号溝跡（第13図）

位置 調査区南東部のD 3 a3 - D 3 b1 区で、台地の平坦部に位置している。

規模と形状 D 3 a3 区から西方向にほぼ直線的に延び、B 3 a2 区で南西方向に曲がり、D 3 b1 区で緩やかに立ち上がっている。

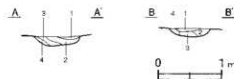
上幅0.44-0.97m、下幅0.28-0.78m、深さ12-14cmで、確認できた長さは7.56mである。断面形は壁が緩やかに立ち上がるU字形を呈している。

覆土 4層に分層される。周囲からの土砂の流入を示す自然堆積である。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|-----------|---|-----|-----------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子少量 | 3 | 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 | 暗褐色 | ロームブロック微量 | 4 | 褐色 | ロームブロック少量 |

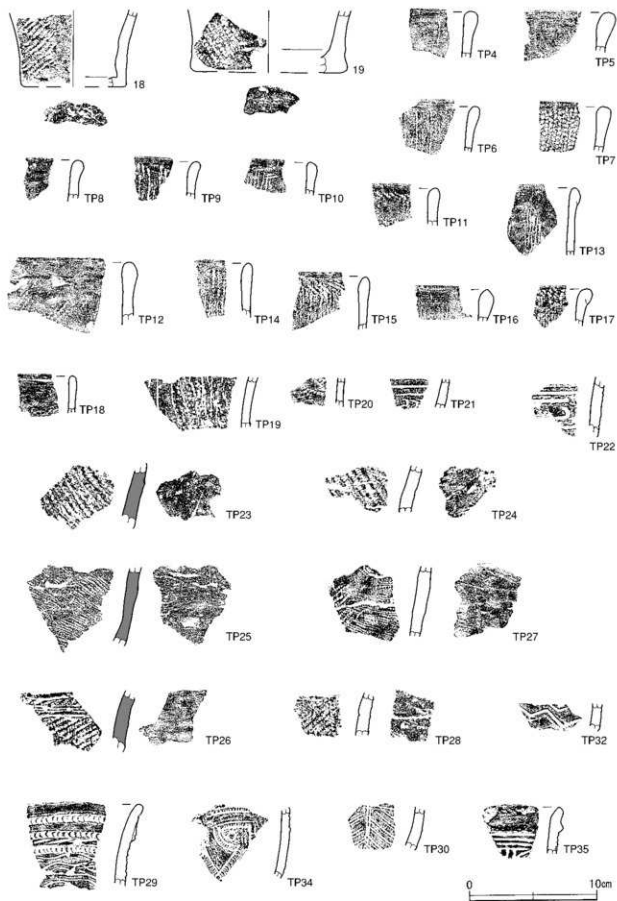
所見 時期及び性格については、遺物が出土していないため不明である。



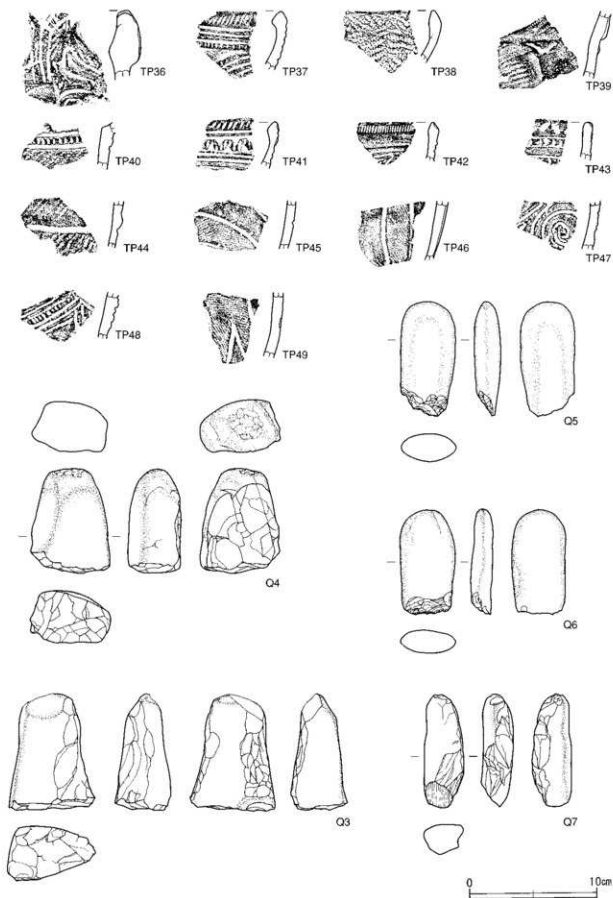
第13図 第1号溝跡実測図

(3) 遺構外出土遺物

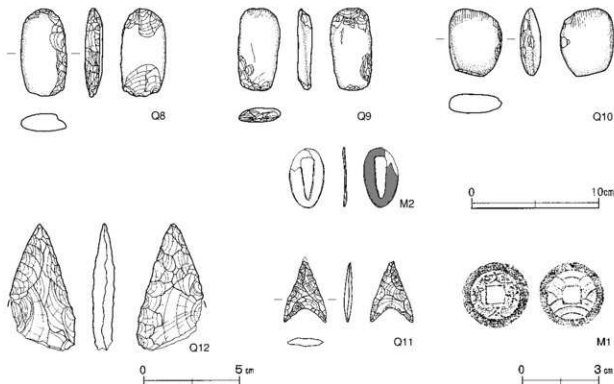
ここでは、調査区内の表土中から出土した遺物や、他時期の遺構への混入と判断された遺物のうち、特徴的なものを実測図と観察表で記載する。



第14图 遺構外出土遺物実測図(1)



第15図 遺構外出土遺物実測図(2)



第16図 遺構外出土遺物実測図(3)

遺構外出土遺物観察表(第14・15・16図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
18	縄文土器	深鉢	-	(6.1)	[8.3]	長石・石英・小礫	にぶい黄褐色	普通	LRの単部斜縄文を施文	C 2e区表土中	中期前 PL6
19	縄文土器	深鉢	-	(4.9)	[12.4]	胚・胚割・小礫	にぶい黄褐色	普通	RLの単部斜縄文を施文	C 3f区表土中	中期前 PL6

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP 4	縄文土器	深鉢	-	(3.6)	-	石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口唇部は肥厚 縦方向の照糸文施文	西部表土中	早期前葉 PL 6
TP 5	縄文土器	深鉢	-	(3.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口唇部は肥厚して外脣 口唇上ナデ	中央部表土中	早期前葉
TP 6	縄文土器	深鉢	-	(3.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口唇部は肥厚 縦方向の照糸文施文	西部表土中	早期前葉
TP 7	縄文土器	深鉢	-	(3.6)	-	石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口唇部は肥厚 縦方向の照糸文施文	西部表土中	早期前葉
TP 8	縄文土器	深鉢	-	(3.2)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	口唇部は肥厚してやや外脣 C 3g区表土中	早期前葉	
TP 9	縄文土器	深鉢	-	(2.9)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	口唇部肥厚 縦方向の照糸文施文	西部表土中	早期前葉 PL 6
TP 10	縄文土器	深鉢	-	(2.6)	-	長石・雲母	にぶい黄褐色	普通	口唇部は肥厚 縦方向の照糸文施文	東部表土中	早期前葉 PL 6
TP 11	縄文土器	深鉢	-	(2.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口唇部は肥厚 口唇外面に縄文施文	D 3a区表土中	早期前葉
TP 12	縄文土器	深鉢	-	(4.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口唇部は肥厚 斜位に照糸文施文	SK 16層土中層	早期前葉
TP 13	縄文土器	深鉢	-	(5.3)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	口唇部は肥厚 斜位に照糸文施文	西部表土中	早期前葉
TP 14	縄文土器	深鉢	-	(4.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口唇部肥厚 縦方向の照糸文施文	西部表土中	早期前葉
TP 15	縄文土器	深鉢	-	(4.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口唇部は肥厚 縦方向の照糸文施文	西部表土中	早期前葉
TP 16	縄文土器	深鉢	-	(2.5)	-	石英・雲母	褐色	普通	口唇部は肥厚 縦方向の照糸文施文	D 3d区表土中	早期前葉
TP 17	縄文土器	深鉢	-	(3.0)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口唇部は肥厚 縦方向の照糸文施文	西部表土中	早期前葉 PL 6
TP 18	縄文土器	深鉢	-	(2.5)	-	長石	にぶい黄褐色	普通	口唇部は肥厚	C 3e区表土中	早期前葉
TP 19	縄文土器	深鉢	-	(4.1)	-	胚・胚割子・小礫	明黄褐色	普通	縦方向の照糸文施文	西部表土中	早期前葉 PL 6
TP 20	縄文土器	深鉢	-	(2.3)	-	雲母	明赤褐色	普通	アナダラ属の貝殻層緑文	D 2g区表土中	前期後半
TP 21	縄文土器	深鉢	-	(2.3)	-	長石	にぶい黄褐色	普通	半截竹管状工具による沈積文、その下に爪形文を施文	SK 23層土中	早期後葉

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP22	縄文土器	深鉢	-	(4.8)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	竹管状工具による沈線文	中央部表土中	早期後葉
TP23	縄文土器	深鉢	-	(5.1)	-	繊維・石英	にぶい橙	普通	異条斜縄文を施文	東部表土中	前期前半
TP24	縄文土器	深鉢	-	(3.7)	-	繊維・長石	にぶい橙	普通	R Lの単部縄文を施文	南西部表土中	前期前半
TP25	縄文土器	深鉢	-	(6.3)	-	繊維・長石	にぶい橙	普通	異条斜縄文を施文	C3c区表土中	前期前半 PL6
TP26	縄文土器	深鉢	-	(4.8)	-	繊維	にぶい黄橙	普通	L Rの縄文上に横方向の半載竹管文を施文	B3f区表土中	前期前半 PL6
TP27	縄文土器	深鉢	-	(5.4)	-	繊維・長石・石英	橙	普通	異条斜縄文を横方向に施文	C3c区表土中	前期前半
TP28	縄文土器	深鉢	-	(3.4)	-	繊維・長石・石英	にぶい橙	普通	L Rの単部斜縄文上に竹管文を施文	B3i区表土中	前期前半
TP29	縄文土器	深鉢	-	(6.4)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	複合口縁部に押し引きの爪形文を2段に施文 頸部に押し引きの爪形文と半載竹管による多段の波状文	中央部表土中	前期後半 PL6
TP30	縄文土器	深鉢	-	(3.4)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	半載竹管により肋骨文を施文	南西部表土中	前期後半
TP32	縄文土器	深鉢	-	(2.0)	-	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	半載竹管により山形沈線文を施文	南西部表土中	前期後半
TP34	縄文土器	深鉢	-	(5.6)	-	雲母	にぶい橙	普通	縄文地文上に竹管状工具による爪形文で文線を描出し中心に円形竹管文を施文	南西部表土中	前期後半 PL6
TP35	縄文土器	深鉢	-	(3.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部縄文施文 口縁部無文 頸部に棒状沈線による文様描出	C3b区表土中	中期前葉 PL6
TP36	縄文土器	深鉢	-	(5.4)	-	長石・石英・小礫	にぶい赤橙	普通	液沈線で縄文地文に棒状沈線による施文	中央部表土中	中期前葉 PL6
TP37	縄文土器	深鉢	-	(4.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部刻み目 横方向の棒状沈線区画に三角彫刻文	中央部表土中	中期前葉 PL6
TP38	縄文土器	深鉢	-	(4.1)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部はわずかに肥厚し内湾するR Lの単部縄文を横方向に施文	C3a区表土中	中期
TP39	縄文土器	深鉢	-	(5.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	腹等の間にR Lの単部縄文を施文 Y字状隆帯垂下	中央部表土中	中期前葉 PL6
TP40	縄文土器	深鉢	-	(3.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	棒状沈線の間の隆帯に刻み目を持つその下にR Lの単部斜縄文を施文	C3e区表土中	中期前葉
TP41	縄文土器	深鉢	-	(3.7)	-	長石・雲母	灰黄褐	普通	棒状沈線の間に三角文を上下交互に刺突 口唇部刻み目	C2a区表土中	中期前葉 PL6
TP42	縄文土器	深鉢	-	(3.1)	-	石英	にぶい橙	普通	口唇部刻み目 沈線区画内に丸棒状刺突文を施文	中央部表土中	中期前葉 PL6
TP43	縄文土器	深鉢	-	(3.0)	-	長石	にぶい黄橙	普通	横方向の半載竹管文の間に爪形文を施文	東部表土中	中期前葉
TP44	縄文土器	深鉢	-	(3.6)	-	長石・石英・小礫	にぶい黄橙	普通	L Rの単部縄文を地文に棒状沈線による施文	中央部表土中	中期前葉
TP45	縄文土器	深鉢	-	(3.6)	-	長石・石英	橙	普通	沈線間に縄文を施文	中央部表土中	後期前葉
TP46	縄文土器	深鉢	-	(4.5)	-	長石・石英	橙	普通	沈線間に縄文を施文	中央部表土中	後期前葉
TP47	縄文土器	深鉢	-	(3.8)	-	長石	橙	普通	R Lの単部縄文地文に、渦巻文状沈線を施文	C3b区表土中	後期前葉
TP48	縄文土器	深鉢	-	(3.7)	-	長石	橙	普通	棒状沈線の隆帯に刻み目を施文	中央部表土中	中期前葉
TP49	縄文土器	深鉢	-	(5.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	沈線区画内に縄文を施文	中央部表土中	後期前葉

番号	器種	径	孔幅	重量	初跡年	材質	特徴・その他	出土位置	備考
M1	文久永貢	2.6	0.6	2.7	1863	銅	四文銭 十一波	SK10覆土中	PL6

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴・その他	出土位置	備考
M2	切羽	4.7	2.7	0.2	6.4	銅	火熱痕あり	SK30覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴・その他	出土位置	備考
Q 3	スツブ形器	(6.8)	(9.2)	4.3	(300)	凝灰岩	自然礫を使用 握り部に両側から挟り	C 3 b3区表土中	PL 5
Q 4	スツブ形器	8.2	6.3	4.1	300.1	砂岩	自然礫を使用 握り部に挟り	南西部表土中	PL 5
Q 5	礫石斧	9.0	4.3	2.1	113.4	ホルンフェルス	一端を片刃状に打ち欠き使用	D 2 h2区表土中	PL 5
Q 6	礫石斧	8.3	4.3	1.8	90.9	ホルンフェルス	一端を片刃状に打ち欠き使用	C 2 i0区表土中	PL 5
Q 7	磨製石斧	3.1	2.4	8.9	100.8	緑色凝灰岩	片刃 側面に打ち欠き痕が残る	中央部表土中	PL 5
Q 8	礫石斧	5.3	4.1	1.6	53.0	凝灰岩	両端を打ちかいて使用	C 2 g0区表土中	PL 5
Q 9	磨製石斧	6.4	3.3	1.1	38.2	緑色凝灰岩	両端を打ちかいて使用	中央部表土中	PL 5
Q 10	磨製石斧	6.9	3.6	1.4	52.9	凝灰岩	刃部は打ち欠き痕が残る	SD 3 表土中	PL 6
Q 11	石鏃	2.3	1.7	0.4	0.9	安山岩	無茎 両面押圧剥離 基部の挟りは深く、側面は直線	SD 2 表土中	PL 6
Q 12	尖頭器	6.3	3.4	1.2	22.5	安山岩	基部欠損	中央部表土中	PL 6

表 2 竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) 長軸 × 短軸	壁高 (cm)	床面	内部施設				炉・竈	覆土	出土遺物 (重複関係 旧→新)	備考	時代		
							壁溝	主柱穴	貯蔵穴	ピット						入口	
1	B 3 d9	N-40°-E	方形	4.77×4.46	21-79	平坦	全周	4	2	1	1	1	炉 1	自然	土師器片、 土製品、 鉄製品		古墳
2	D 2 f3	N-43°-E	方形	3.45×3.40	33-45	平坦	全周	-	1	2	1	1	竈 1	自然	土師器片、 須恵器片、 土製品(前 継車)	本跡→ SK 10-61	平安

表 3 溝跡一覧表

番号	位置	方向	断面形	規模 (m)				壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長さ	上幅	下幅	深さ (cm)					
1	D 3 a3-D 3 b1	N-27°-E	U字形	7.56	0.44-0.97	0.28-0.78	12-14	緩斜	皿状	自然		
2	B 3 c7-B 3 e8	N-41°-W	U字形	10.92	0.84-1.39	0.54-1.23	11-23	緩斜	皿状	自然	土師質土器 (火鉢)	
3	B 3 b6-B 3 d8	N-42°-W	U字形	11.22	1.19-1.64	0.53-1.08	10-32	緩斜	皿状	自然	土師質土器 (火鉢)	

表 4 炭焼窯一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長径軸 × 短径軸 (m)	深さ (cm)					
1	D 2 g2	N-138°-E	楕円形	4.80×2.47	56	垂直	平坦	人為	瓦質土器、陶磁器片、瓦、鉄製品、 ガラス製品、炭化材、貝	

表 5 土坑一覧表

土坑 番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 遺構番号・新旧関係 (古→新)
				長径軸 × 短径軸 (m)	深さ (cm)					
1	D 2 h3	-	円形	1.18×1.18	22	外傾	平坦	人為	土師器片 縄文土器片	
2	D 2 i4	N-22°-E	楕円形	1.14×1.00	18-25	外傾	平坦	人為	土師器片	
3	D 2 h3	N-27°-E	長方形	1.33×0.94	33-38	外傾	平坦	人為	土師質土器片 陶器片	
4	D 2 h4	-	円形	0.60×0.60	8	外傾	平坦	自然		

土坑 番號	位置	長徑方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 遺構番號・新旧關係 (古→新)
				長径(軸)×短径(軸) (m)	深さ (cm)					
5	D 2 i 4	-	円形	1.00× 1.00	24-28	緩斜	平坦	人為		
6	D 2 h 7	N-35°- E	楕円形	1.48× 1.20	50	外傾	平坦	人為	須惠器片	
7	D 2 h 6	-	円形	1.10× 1.04	32	緩斜	平坦	人為		
8	D 2 h 4	-	[円形]	1.02× (0.76)	20-24	外傾	平坦	人為	土師器片	
10	D 2 f 3	N-52°- E	楕円形	1.09× 0.90	21	垂直	平坦	人為	文久永裏, 土師器片	512 → 本跡
11	D 2 f 4	-	円形	1.30× 1.20	34	緩斜	皿状	人為	土師器片, 須惠器片	
13	D 2 j 6	-	円形	0.68× 0.63	36	緩斜	皿状	自然		
14	D 2 g 8	-	円形	1.04× 0.98	35	緩斜	皿状	人為	縄文土器片	
15	D 2 g 8	-	円形	1.04× 1.02	36-38	緩斜	皿状	自然		
16	D 2 h 8	-	円形	1.14× 1.08	50	外傾	平坦	自然		
17	D 2 g 5	N-58°- E	楕円長方形	1.96× 1.42	16-23	緩斜	平坦	自然		本跡→SK18
18	D 2 g 5	N-59°- E	楕円長方形	1.18× 1.02	46	外傾	平坦	自然		SK17→本跡
19	D 2 c 3	N-0°	楕円形	2.04× 1.26	12	緩斜	平坦	人為	内耳鍋	
20	D 2 d 4	N-33°- E	楕円形	0.72× 0.64	20	緩斜	皿状	自然	縄文土器片	
21	D 2 e 6	-	円形	0.96× 0.96	36	緩斜	皿状	自然	縄文土器片	
22	D 2 g 8	-	円形	1.15× 1.12	30	緩斜	平坦	人為	縄文土器片	SK24→本跡
23	D 2 f 3	-	円形	1.18× 1.16	20-28	外傾	平坦	人為	土師器片	
24	D 2 g 8	-	[円形]	0.94× (0.78)	8-14	外傾	平坦	自然		本跡→SK22
25	D 2 g 8	-	円形	1.48× 1.46	50	外傾	平坦	人為	土師器片	
26	D 2 g 9	-	円形	0.88× 0.88	20	緩斜	皿状	人為		
27	D 2 g 8	-	円形	0.98× 0.98	50	外傾	平坦	自然	土師器片	
28	D 2 f 8	N-44°- E	楕円形	(1.50)× 0.86	20-30	緩斜	平坦	人為		本跡→SK29
29	D 2 f 9	N-44°- E	楕円形	1.62× 1.24	46	外傾	平坦	人為		SK28→本跡
30	D 2 e 8	N-46°- E	楕円形	1.34× 1.20	38	外傾	皿状	人為	ブタ頭蓋骨, 幼羽, 瓦片	
31	D 2 h 8	N-90°- E	楕円形	0.46× 0.38	54	外傾	平坦	自然	縄文土器片	
33	D 2 f 8	N-21°- W	楕円形	1.24× 1.15	32	垂直	平坦	人為		
34	D 2 e 0	N-17°- E	長方形	0.82× 0.54	22	垂直	平坦	自然		
35	D 2 f 4	N-29°- E	楕円形	1.34× 0.99	50	外傾	平坦	自然		
36	D 2 j 3	-	円形	1.25× 1.24	44	外傾	平坦	不明		
38	D 2 f 3	-	円形	1.57× 1.52	47	垂直	平坦	人為	土師器片, 陶器片, 磁器片	
39	D 3 b 1	N-18°- W	楕円形	0.94× 0.81	22	外傾	平坦	自然		
40	D 2 c 6	N-52°- W	楕円形	1.38× 1.29	11	外傾	平坦	自然		
41	D 3 c 1	N-18°- E	楕円形	2.14× 1.33	60	外傾	平坦	人為		
42	D 2 b 6	N-85°- W	楕円形	0.90× 0.79	72	外傾	平坦	人為		
44	D 2 b 7	N-37°- W	楕円形	0.68× 0.50	66	垂直	平坦	自然		
45	D 2 a 7	-	円形	0.50× 0.47	35	垂直	平坦	人為		
47	D 2 a 7	-	円形	0.72× 0.70	61	垂直	平坦	人為		
48	D 2 b 9	-	円形	0.94× 0.86	22	外傾	皿状	人為		
49	C 2 i 0	-	円形	0.56× 0.52	24	垂直	皿状	自然		
50	D 2 a 6	-	円形	0.74× 0.70	16	垂直	平坦	自然		
51	D 2 a 6	N-58°- W	楕円形	0.80× 0.72	14	外傾	凹凸	自然		
52	C 2 j 5	N-41°- W	楕円形	0.92× 0.84	20	外傾	皿状	人為	瓦質土器片, 陶器片	
53	C 2 j 8	-	円形	1.46× 1.46	10-22	外傾	平坦	自然		
54	C 3 i 1	N-62°- W	楕円形	0.94× 0.66	26	外傾	皿状	自然		
55	C 3 h 2	N-50°- E	[楕円形]	(0.80)× (0.70)	10	緩斜	凹凸	自然		
57	C 2 j 8	N-56°- E	楕円形	1.58× 1.44	20	外傾	平坦	人為		

土坑 番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 遺構番号・新旧関係 (古→新)
				長径(軸) > 短径(軸) (m)	深さ (cm)					
58	C 2 j 8	N- 31°- E	楕円形	1.70× 1.26	26	外傾	皿状	人為		
59	C 2 i 8	-	円形	1.20× 1.10	18	外傾	平坦	自然	土師器片 縄文土器片	
61	D 2 g 3	N- 47°- E	楕円形	1.58× 1.36	62	垂直	平坦	人為	土師器片, 石	S12 →本誌
63	C 2 h 9	N- 61°- E	楕円形	2.02× 1.57	9 - 23	外傾	平坦	自然	縄文土器片	
64	C 3 g 2	-	円形	0.60× 0.60	20 - 24	外傾	平坦	人為		
65	C 3 g 2	-	円形	0.52× 0.50	14	外傾	皿状	自然		
66	C 3 j 1	N- 6°- E	楕円形	0.82× 0.72	40	外傾	皿状	自然	土師器片, 石	
68	D 2 c 7	N- 60°- W	楕円形	0.79× 0.71	18	垂直	平坦	人為	陶器, 小皿	
69	A 3 h 9	-	円形	0.80× 0.78	18	緩斜	皿状	人為		
70	A 3 h 0	-	円形	0.72× 0.68	20	外傾	平坦	自然		
71	A 3 g 0	N- 34°- E	楕円形	0.82× 0.60	16	緩斜	皿状	自然		
72	A 4 f 1	N- 53°- E	楕円形	0.76× 0.68	20 - 26	緩斜	皿状	人為		
73	A 4 f 1	N- 38°- W	楕円形	0.84× 0.54	10 - 18	緩斜	凹凸	自然		
74	A 4 g 2	-	円形	0.50× 0.50	20	外傾	皿状	自然		
75	A 4 h 1	N- 36°- W	楕円形	1.90× 0.68	28	外傾	平坦	人為		
76	A 4 h 2	N- 90°	楕円形	0.68× 0.58	18	緩斜	皿状	自然		
77	A 4 h 1	N- 28°- W	楕円形	1.30× 0.72	8 - 26	緩斜	皿状	自然		
78	A 4 h 1	N- 32°- W	楕円形	0.90× 0.50	20	緩斜	皿状	人為		
79	A 4 i 1	N- 21°- W	楕円形	1.28× 0.92	25	緩斜	凹凸	自然		
80	A 4 i 1	-	円形	0.56× 0.56	12	緩斜	皿状	自然		
81	A 4 j 1	N- 20°- E	楕円形	0.84× 0.42	12	緩斜	皿状	自然		
82	A 3 i 9	N- 90°	楕円形	0.55× 0.46	10 - 20	緩斜	凹凸	自然		
83	A 3 j 9	N- 30°- E	楕円形	0.70× 0.60	18	緩斜	皿状	自然		
84	B 4 b 1	N- 47°- W	楕円形	0.76× 0.59	29	外傾	皿状	自然		
85	B 3 b 8	N- 42°- W	楕円形	0.84× 0.76	22	外傾	皿状	人為		
86	B 3 f 8	N- 69°- W	楕円形	0.60× 0.42	31	垂直	平坦	自然		
87	B 3 f 7	N- 78°- W	楕円形	0.70× 0.49	10	外傾	平坦	人為		
88	B 3 f 7	N- 20°- W	楕円形	0.79× 0.64	12	外傾	平坦	自然		
89	B 3 i 6	N- 68°- W	楕円形	1.00× 0.58	30	外傾	皿状	自然		
90	B 3 f 8	-	円形	0.62× 0.59	34	垂直	平坦	自然		
91	B 3 i 7	N- 83°- E	楕円形	0.88× 0.79	18	外傾	平坦	人為		
92	B 3 i 7	N- 71°- E	楕円形	0.58× 0.44	11	外傾	平坦	自然		
96	C 3 h 3	N- 46°- W	楕円形	1.10× 0.64	13	外傾	平坦	人為		
97	C 3 g 4	-	円形	0.43× 0.42	18	外傾	平坦	自然		
100	D 2 b 6	N- 32°- W	楕円形	1.20× 0.94	12	緩斜	平坦	自然	陶器片, 石	



第17图 堂越遗址全体图

第4節 まとめ

今回の調査で、古墳時代と平安時代の竪穴住居跡各1軒、近世の土坑1基、溝跡2条、近代の炭焼窯跡1基、時期及び性格不明の土坑84基、溝跡1条を検出した。出土遺物は旧石器時代から近代にわたっている。ここでは、それぞれの時期の遺構と遺物について概要を述べ、まとめたい。

1 古墳時代

古墳時代の竪穴住居跡は、出土土器から5世紀前葉に比定した。調査区域内では当該期の住居跡は1軒のみで、台地の平坦部から標高の下がった斜面部に位置している。本住居跡が含まれると考えられる集落は、調査区域外東側の谷津に面した台地縁辺部に位置していると考えられる。

2 平安時代

平安時代の竪穴住居跡は、出土土器から9世紀中葉に比定した。やはり調査区域内では当該期の住居跡は1軒のみである。本住居が含まれる集落は、表採遺物を確認する事ができる調査区域外西側の台地平坦部に位置していると考えられる。

3 近世

近世の遺構は、土坑1基、溝2条が確認された。第19号土坑からは内耳鍋がほぼ完形で出土しており、17世紀前葉に比定した。P14の内耳鍋は器高が口径の約5分の1のもので、底部は上げ底気味である。体部は内湾して立ち上がり、耳は幅広になり内側と外側につまみ出されるもので、註1文献で分類するⅣ類に位置付けられるものと考えられる¹⁾。

第2・第3号溝跡は、位置する地形と形状から排水路的な性格を考えた。2つの溝跡から出土した火鉢については、ほぼ同時期の17世紀前葉のものであり、廃棄されたものと判断した。

4 近代

近代の遺構としては炭焼窯跡1基である。構造は近代に導入が進んだ改良窯である。構造上の特徴として炭化室と前庭部の間に粘土による障壁を設け、冷風を防ぐことで灰化と未炭化を防いでいる事が挙げられる²⁾。炭焼窯内からは多量の不要物が投棄された状態で出土しており、炭焼窯を廃絶した後に不要物の廃棄土坑として利用されたことが分かる。投棄されていたのは目薬のガラス瓶³⁾や銘柄入り徳利⁴⁾、皿類など日常雑器類ばかりで、明治末以降現代にかけて生産されたものである。地権者もその存在は知らなかった事から、炭焼窯の使用された時期は明治末以降～戦前と考える。付近では戦前まで炭焼きが行われており、茨城町大畑遺跡では、近代以降と考えられる炭焼窯跡4基が検出されている⁵⁾。炭焼窯は戦後の生活の電化、ガス化に伴い炭の需要がなくなることによって失われていったようである。

今回の調査の結果、縄文時代の遺構は確認されなかったが、縄文時代早期から後期にかけての土器片が多数確認されている。縄文時代から当遺跡周辺に人々が生活していた痕跡がうかがえる。その後、当遺跡周辺の台地上では古墳時代から奈良・平安時代にかけて断続的に人々が生活を営み、近世・近代にはふたたび生活の場として利用されていたと考えられる。第19号土坑以外の土坑からは伴う遺物がなく時期の決定はできなかったが、これらの土坑も人々の生活の痕跡を示すものと考えられる。今回は路線幅のみの調査であり、遺跡の全容は今後の調査が待たれるが、今回の調査の結果、当遺跡は、縄文時代、古墳時代、平安時代、近世、近代の複合遺跡であることが判明した。

註)

- 1) 白田正子「茨城県における中世末から近世にかけての土師質内耳土器について」『研究ノート』7号 茨城県教育財団 1998年6月
- 2) 岸 清俊「埼玉における木炭生産と炭窯の変遷」『研究紀要』第10号 埼玉県立歴史資料館 1988年3月
- 3) ロート製業㈱に問い合わせたところ、このロート目業瓶は初期型のもので明治42年から昭和6年まで製造販売されたものである事が判明した。
- 4) 「大徳」銘の徳利は、石岡市の大徳酒造本店が販売促進用に昭和10年代から昭和34年頃まで配っていたものの1本であると考えられる。
- 5) 長谷川聡「北関東自動車道(友部-水戸)建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 大作遺跡 大畑遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第136集 茨城県教育財団 1998年3月

参考文献

- ・ 櫻村宣行「和泉式土器編年考-茨城県を中心として」『研究ノート』5号 茨城県教育財団 1996年6月
- ・ 白石真理「武田石高遺跡 古墳時代編」『ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告』第17集 茨城県教育財団 1999年
- ・ 服部敬史「内耳土器の研究(上)」『土曜考古』第21号 土曜考古学研究会 1997年10月
- ・ 服部敬史「内耳土器の研究(下)」『土曜考古』第22号 土曜考古学研究会 1998年5月
- ・ 江崎良夫「土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 原田北遺跡Ⅱ 西原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第85集 茨城県教育財団 1994年3月
- ・ 留川 修「鳥名ツバタ遺跡 上河原崎・中西特定地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」『茨城県教育財団文化財報告』第203集 茨城県教育財団 2003年3月
- ・ 柳 正博「比企丘陵の炭焼き」『研究紀要』第7号 埼玉県立歴史資料館 1985年3月
- ・ 朱達祥男「比企丘陵の炭焼き-嵐山町連山の白炭窯の製作工程について」『研究紀要』第10号 埼玉県立歴史資料館 1988年3月
- ・ 玉里村立史料館 『特別展 近現代遺跡、発掘!』 玉里村立史料館 2001年11月

写 真 図 版

堂 越 遺 跡



調査区全景(南から)

第1号住居跡
完掘状況



第1号住居跡
遺物出土状況

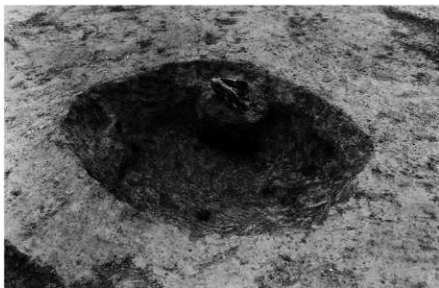


第2号住居跡
完掘状況





第19号土坑
遺物出土狀況



第30号土坑
獸骨出土狀況



第2・3号溝跡
完掘狀況

第1号炭烧窯跡
完掘状況

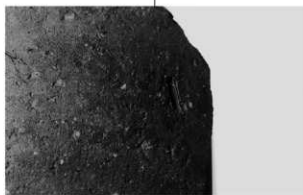


第1号炭烧窯跡
遺物出土状況



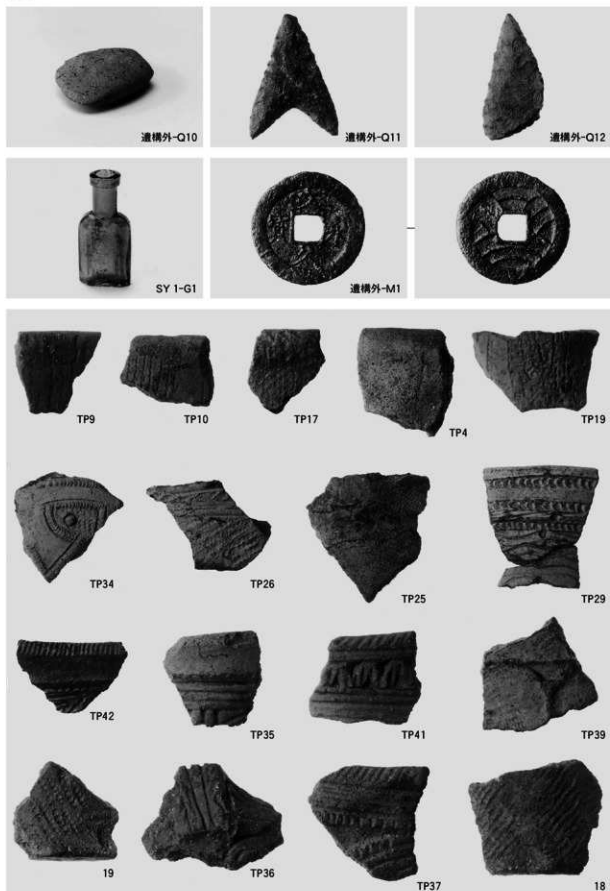
第1号炭烧窯跡
煙道部断ち割り状況







第1号炭焼窯跡出土遺物。石器



石器，ガラス製品，古銭，遺構外出土縄文土器

茨城県教育財団文化財調査報告第245集

堂越遺跡

一般県道紅葉石岡線道路改良事業地内
埋蔵文化財調査報告書

平成17(2005)年3月22日 印刷
平成17(2005)年3月25日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
T E L 029- 225- 6587

印刷 (有)川田プリント
〒310-0041 水戸市上水戸4丁目6-53
T E L 029- 253- 5551